

廃人トリップ

オキシゲドン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

深夜まで厳選作業をしていた主人公『佐藤 海』

寝落ちして気付いたら見覚えの無いベッドの上だった。

ポケモンの世界にやってきてしまった廃人は元の世界に帰る為に二匹のポケモンを探す旅を始める。

目次

1話	『転移…?』	1
2話	『旅の道連れ』	4
3話	『ジム戦』	12
4話	『出会い』	17
5話	バトルと出会いと新たな仲間	25
6話	初めての授業	35
7話		41

1話 『転移…?』

「さて、ジャッジさんお願いします!」

俺の名前は佐藤 海。

いま自室で新作に向けてポケモンを厳選中だ。

だが中々理想個体が出ずに、時間はもう深夜の1時になろうとしていた。

「H, A, B, D, S! やつと出たか。さて、セーブ…セーブ…」

終わった事で気が抜けたのか、俺の意識はそこで途絶えてしまった。

★★☆☆

「…くっ、寝落ちしちゃったのか! セーブは出来てるんだろうな!」

俺は慌てて枕の隣にあるはずのDSを探したが…それが見つかる事は無かった。

それよりも重大な問題が見つかったからだ。

「(っ)…どこだよ!」

俺の部屋のベッドと寝心地がまるで違うのだ。

不審に思い、周りを見渡すと、そこは俺の部屋ではなかった。

いきなり別の部屋にいるこの状況にパニックになりそうになるが、まずは状況を確認するのが先決だと思い、冷静にもう一度見渡してみる。

部屋の中はまるで安いホテルのようで、目ぼしい物は窓とバッグくらいだ。

「まずは…窓からかな」

窓から顔を出してみる。

右を向くと、そこには大きなタワーが立っていた。

「なんだあれは!」

下の通行人が何人かこちらを振り向く。

それを無視して窓を閉める。

現実逃避をするようにバッグを見ると、さっきは陰に隠れていてよく見えなかったが、そこにはモンスターボールが6個ついたベルトが

あった。

「どういう事だよー」

少しでもヒントになるものがないか、気が引けたがバッグの中を調べてみると、カードが何枚か入っていた。

カードの一つを手にとると、ポケモン内に出てくる『トレーナーカード』にそっくりのカードだった。

「まさか…」

他のカードを手にとると、『TMVパス』や『エレベーターのキー』など、もう確定的な証拠品が出て来た。

「ここは…ポケモンの世界だとも言うのか？」

だとすれば、さっきのタワーはプリズムタワーで間違いないだろう。

「…帰れるのか、これ？」

恐怖だとかそういう感情はない。

なぜならトレーナーカードを見る限り、俺の今の状態はゲーム内の俺だと思うからだ。

だったらボックスを覗けば愛用してきたポケモン達もいるということだろう。

と、突然ドアがノックされた。

「大丈夫ですかー？」

多分、何回も大声を出したせいで心配されたのであろう。

ドアを開けるとそこにはジョーイさんがいた。

「あ、すいません。大丈夫です」

ジョーイさんは心配そうに去って行った。

…まあなあってしまった物は仕方ない。

それに帰る当てが無い訳ではない。

それは伝説のポケモン『パルキア』だ。

空間を操るあのポケモンならば俺をもとの世界に返す事が出来るかもしれない。

だが、それをするには『パルキア』を探し出さなければいけない。『パルキア』を見つけ出せば、きっと『ディアルガ』も見つかるだろう。

『ディアルガ』は時間を操るポケモンだ。

そうすればいくら時間がかかった所で関係なく戻れる。

折角だからこの世界を楽しみながら搜索をしようと決めた。

★☆☆

「…なんでだ」

俺はいま、ボックスの中の確認をしていた。

使い方はジョーイさんに教えてもらった。

確かに予想通り、ボックスの中には俺の相棒達が居た。…伝説のポケモン以外の。

「まああの二匹はもともと持ってなかったから良いんだけどね」

厳選用のファイアロー一匹という今の手持ちを、変えておく。

ボックスについてはもう一つ気付いた事が有る。

それは殿堂入りの記録が消えている事だ。

バッグの中になかったし、多分バッジも無かった事にされている。

「まさかポケモン以外のほぼ全てが消されているとは…」

まあ現実でレート1800代をキープしてきたようなパーティーも構築出来る。なんとかなるだろう。

それより、まずは最初の目標を立てなければならぬ。

「まずは…情報収集か」

情報収集に一番よさそうな事は…やはりチャンピオンになる事か？

いろんな地方を回る必要があるこの旅で、権力というのはあればあるほど良い。

「…なら最初の目標が決まったな」

最初の目標は一個下にある町のジム…ハクダンジムに向かい、バッジを取る。

なぜミアレでバッジを取らないかというのと、プリズムタワーに明かりがともっていないなかったからだ。

という事は、ジムにも挑戦出来ないだろう。

「さて、待つてろよ！ディアルガ！パルキア！」

そう言いながら、俺は自転車で走り出した。

2話 『旅の道連れ』

くハクダンシティく

「さて、ジムの方向はつと」

俺は無事にハクダンシティへと辿り着いていた。

え？道中はどうしたかって？

ミアレシティからこの町までは一直線、しかも草むらに入る必要も無いのだ。

当然カッツだ。

「この看板…」

『リーダー ビオラ

笑顔を 見逃さない カメラガール』

毎回思うのだがこのキャッチコピーは誰が考えているのだろうか？

ジム審査委員会みたいなのがいるのだろうか？

「そこあなた！」

さて、初のジム戦だ。パーティー的には楽勝とはいえ何が起こるか分からない。気合を入れて行かねば。

「ちよつと、止まってつたら！」

いきなり肩を掴まれて驚きながら振り返ると、そこにはどこか見覚えのある人が立っていた。

「ジムに挑むつもりならまだ無理よ」

「え？どうしてですか？」

「あの子、写真を取りに出かけると中々帰って来ないのよ。まあ数日前に出て行ったから明日には帰ってくると思うわ」

あちやー、タイミングが悪い。

ゲームの影響でジムリーダーは常にジムにいるもんだと思っていたが、確かにゲーム内でもジムリーダーをジム以外の場所で見かける事もあった。

「そうなんですか…」

「ええ、妹がごめんなさい。あ、私の名前はパンジーよ。よろしくね」

「パンジーさんですか、俺は佐藤って言います。よろしく」

「そうだ！お詫びに私が特訓して上げるわ！」

特訓：…？ジム戦と何が関係あるのだろうか？

「あの子の使う戦法を突破する為には強風の中を突き進まなきゃいけないの」

「そうなんですか」

ふむ、ならパーティーを少し変える必要が出てくるか？軽いポケモンとかは論外だろうしな。

「じゃあお願いします」

「任せて！広場はこっちよ」

俺はパンジーさんに連れられて広場へと移動した。

☆☆☆☆

「じゃあルールは1v1で良いわよね？」

「構いませんよ」

さて、ゲームでは序盤に登場するだけ、バトルも無しというキャラだったので手持ちが楽しみだ。

妹と同じ様に虫タイプを使うのかな？

「私はこの子よ！」

そう言っつてボールから出して来たのは『オンバーン』だった。

予想外に強いモンスターがきた。

このモンスターはドラゴンタイプの中でも優秀な素早さを持つが、特殊火力は今ひとつという種族値だったはずだ。

俺が選ぶポケモンは…。

「いけっ！『マニニューラ』！」

ボールから空中に飛び出したマニニューラは回転しながら落下し、スタツと着地した。

このマニニューラは陽気の攻撃力・素早さ特化だ。

それに、襷を持たせてあるので負ける事は無いだろう。と思っつていと。

「あら、それは気合いの襷ね？」

「知ってるんですか？」

「これでもルポライターをやつててね？ ジム戦ではアイテムの使用は禁止されてるから後で外しておくのよ？」

ほう、アイテムの使用は禁止されているのか。しらずに行っていたら門前返しを食らっていたな。

これが分かったただけでもこのバトルをやつてもらった意味があるというものだ。

感謝しつつ、ことわつて襷を外す。

「さあ、始めましょうか！」

オンバーンが空中に飛び上がり、気合い十分と言わんばかりに鳴き声を上げる。

それに対してマニニューラは構えを取つてはいるが、リラックスした感じだ。

多分あのオンバーンは頑張りやかなんなかのだろう。控えめでも臆病でもなさそうだし一安心かな。

「オンバーン！ 暴風よ！」

オンバーンが羽を動かすと、俺では立つていられないくらいの風が巻き起こる。

「マニニューラ！ れいとうパンチで叩き落としてやれ！」

マニニューラの爪が青く光り、オンバーンの方へ向かおうとする。

突然パンジーさんが話しかけて来た。

「この強風の中、空中にいるオンバーンに当てる事が出来るかしら？」

その言葉でハツとし、マニニューラを見ると、一歩ずつ進んではいるが確かに空中まで行くのは無理であろう事が想像出来た。

「マニニューラ！ 作戦変更だ！ 氷の礫を打ち出せ！」

攻撃に特化しているからか、強風の中でもオンバーンに向かって飛んで行く氷の礫。

だが、その攻撃は避けられてしまう。

（氷の礫の命中は1000…だがあのオンバーンは避けた。やはりゲームとは何もかもが違う）

「あなたのマニニューラ、れいとうパンチといい氷の礫といい、珍しい技を覚えているのね。後で取材させて？」

「はあ、構いませんが」

「ありがとう！じゃあ仕切り直しね。暴風よ！」

くっ何か方法は…。

バッグの中から何故か入っていたポケモン図鑑を取り出してマニニューラに翳してみる。すると

マニニューラ Lv80 ♀

特性：わるいてぐせ

電光石火

だましうち

凍える風

みだれひつかき

悪巧み

メタルクロー

つめとぎ

なげつける

いやなおと

つじぎり

よこどり

おしおき

悪の波動

れいとうパンチ

氷の礫

猫騙し

つららおとし

…これはマニニューラのステータスか？何故か表示されているのは名前、性別、特性、技だけだ。詳細なステータス数値がない。

技が一段下がっているのは遺伝技だろう。そして技が4つだけじゃないということはすべて使えるということか？…試してみるかちはある。

「マニニューラ！まだいけるな！」

声をかけるとこちらに向けて手を振るマニニューラ。カッコいい！

惚れちまうぜー！

「じらおとー！」

指示すると、マニユーラが手を上に上げて力をためる様な仕草をする。

すると突然オンバーンの頭上につららが発生して落下する。

オンバーンは急いで避けようとして横に移動しようとするが、避けきれずに翼につららが当たってしまった。

その影響で地面へと落下してくる。

つららおとしはゲームの中でこいつの技に入れた記憶は無い。ならばいままで覚えた技すべてを使えるということだろう。

ならあの技を使って、飛び上がる前に詰め寄れる！

「マニユーラ、電光石火で詰め寄ってかられいとうパンチ！」

「オンバーン！もう一回飛び上がって！」

オンバーンは飛び上がるようとしているが、つららの当たりどころが良かったのか浮き上がるのに時間がかかっていた。

マニユーラが光り、目にも留まらぬ早さで接近した後、アッパーの要領でれいとうパンチを食らわせた。

加速していたので威力も上がっていたのだろう。オンバーンの巨体が空に浮き上がった。

「落ちて来た所にもう一回れいとうパンチ！」

落ちて来たオンバーンにれいとうパンチを打ち込むマニユーラ。

オンバーンがズザザーと滑って行き、もう立ち上がる気配はなかった。

「負けちゃったわね」

ありがとうと言いながらオンバーンをボールに戻すパンジーさん。

「いえ、参考になりました」

「こちらマニユーラに感謝を言ってからボールに戻す。

「どうだった？何か見えた？」

「はい！とても参考になりました。」

「それは良かったわ。じゃあ約束通り取材をさせてね。」

取材かあ、こつちの世界ではもちろん前世でも受けた事など無い。

緊張するなあ。

「じゃあまずポケモンセンターに行きましょう。」

「はい。マニニューラを回復してあげたいですし」

ポケモンセンターは近くなので、すぐに辿り着く。

ポケモンの治療には少し時間がかかるみたいなので、その間にポケモンセンターの部屋を一室借りて取材するようだ。

「じゃあまずは自己紹介からしましょうか。私の名前はパンジー。ポケモンルポライターをやってるわ」

「佐藤 海です。あるポケモンに会う為に旅をしています」

お互いに改めて自己紹介をする。

「じゃあ年齢と出身を教えて。あと好きなポケモンも！」

「年齢は18、好きなポケモンは：フラージエスですかね」

「へえー珍しいわね、フラージエスとは」

「一番最初に捕まえたポケモンがフラエツテなんです。その最終進化なので」

「成る程ね」

簡単なプロフィール作成の為にいくつか質問を受け、治療が終わった俺たちは、また広場へと戻っていた。

「じゃあ最後に手持ちポケモンの紹介をしてちょうだい。あ！珍しい技があったらその映像も取らせて！」

「わかりました。全員出てこい！」

6個全てのボールを上へ投げる。

そこから出て来たのは、ファイアロー・フラージエス・フシギバナ・ゲッコウガそしてマニニューラとトゲキッスだ。

前半の4匹はいわゆる旅パとよばれるポケモンたちだ。ジムや気分によって残りに引きを入れ替える予定だ。

「トゲキッスはこの地方では珍しいわね。」

「そうなんですか」

一通り全部のポケモンの映像を撮り終えたようだ。

「じゃあ珍しい技はある？あ、つららおとしとこおりの礫とれいとうパンチはもう映像を取ってあるからやらなくて良いわ」

「じゃあ一つだけ」

マニユーラのもう一つの遺伝技、猫騙しを見せる事にする。

トゲキツスにも悪巧みがあるが、見た目がまるで変わらない事が容易に想像できるのでそっちは無しだ。

「マニユーラ、猫騙し」

指示すると同時に、マニユーラが手を打ち鳴らす。

「きゃっ!」

いきなりの事に驚き、パンジーさんがカワイイ悲鳴を上げる。

「あはは」

「もう、先に言ってよね!」

「すいません」

そうこうしているうちに、夕方になってしまった。

「もうこんな時間なのね。じゃあ最後に一つだけ。あなたが探しているポケモンって何?」

「それも書くんですか?」

「違うわ。お礼に情報を持ってたら教えてあげようと思ったのよ。」

「そう言う事ですか・パルキアとディアルガですよ」

「…え?」

いきなり伝説級のポケモンの名前を告げられて思わず聞き返す。

「伝説級のポケモン達じゃない!その二匹を見つけてどうするつもりなの?」

「それは秘密で」

さすがに異世界に行く為ですとは言えない。

というか行つた所で信じてくれないだろう。

「…分かった。じゃああなたの旅に協力してあげる!」

「え?」

「良いじゃない!伝説級のポケモン達よ!その映像が撮ればビッグニュースよ!」

いきなりの事態に今度は俺がついていけない。

「ちよ、ちよっと!仕事はどうするんですか!」

「あら忘れたの?私の仕事はルポライターよ。珍しいポケモンや技な

んかを映像に撮れば良いの。闇雲に町を回るよりあなたと居た方がずっと効率的だと思うのだけれど？」

「…危険ですよ？」

「女性の一人旅よりは安全でしょ？」

悟った。パンジーさんは何が何でも着いてくる気だ。

「分かりました。そこまで言うのなら着いて来ても構いません」

「やった！これからよろしくね！佐藤君♪あ、私の事はパンジーで良いわよ？長い付き合いになるでしょうし」

「じゃあ俺も海で構いません」

こうして一人旅だと思っていた俺の旅にパンジーさんがついてくる事になった。

まあその事はおいといて取り敢えずは明日のジム戦だ。

ここで負けたら計画がいきなり破綻する。

いちおう念には念を入れてガチパで行くか。

3話 『ジム戦』

く翌日く

「さあ、面白い戦いを期待してるわよ！」

そう言つてパンジーはジムの端に避難した。

「話しは聞いているわ。手加減無しで行かせて貰うわよ！」

「こつちも本気で行かせて貰うよ」

「では、ジムリーダー ビオラとチャレンジャー 海の戦いを始めます！使用ポケモンは2体、入れ替えは挑戦者のみ可能です。では、始め！」

「よろしく、アメモース！」

ゲームだと初手はアメタマだ。

あらかじめパンジーに聞いてジムリーダーも何個かパーティーを持っている事を聞いているので驚かない。

対して、俺の初手は…

「行け！シビルドン！」

こいつ、シビルドンだ。

このポケモンのタイプは電気、特性はふゆう。

つまり弱点が無いポケモンなのだ。

その上、ビオラがゲームの中で繰り出してくるポケモンはアメタマ

(水・虫) とビビヨン (飛行・虫) だ。

つまりどちらにも効果抜群な電気タイプなのだ。

「珍しいポケモンを使うって言うのは本当みたいね。そのポケモンとは戦った事が無いわ。」

「じゃあジム戦の後に紹介しますよ」

「あら、ありがとう」

両者、クチを閉じて相手に集中し始める。

そしていつせいに指示をだした。

「アメモース、飛び上がって蝶の舞い！」

「十万ボルトだ！」

シビルドンが十万ボルトを空中にいるアメモースに向かって吐く

が、アメモースはそれを舞いの様な軌道で回避していく。

「良く狙って撃て！一発でも当てれば勝ちだ！」

だが蝶の舞いの効果でどんどん早くなって行くアメモースに十万ボルトは当たらない。

「その程度なのチャレンジャー？さあ準備は整ったわ！むしのさざめき！」

シビルドンの周りを縦横無尽に飛び回り、死角かられいとうビームを放つアメモース。

なんとか一撃は耐えたが、さすがに次の攻撃はやばい。かといって十万ボルトの様な点の攻撃では当たりそうも無い。

「だったら電磁波！」

シビルドンが前方に広がる様に電磁波を撃つ。

二発目のれいとうビームを撃つ体勢を取っていたアメモースにそれが当たると、アメモースの動きが急に鈍くなった。

「よしっ！これで素早さは半減だぜ！」

「くっ、だけどあなたのシビルドンはもうフラフラ、速攻ケリを付けるわ！アメモース電光石火よ！」

アメモースが光りに包まれる。電光石火の発動をもう止める事は出来ないだろう。

だが…

「近づいてくる瞬間に雷パンチで迎え撃て！」

アメモースはシビルドンの右手が光っている事に気付き、回避しようとするが、あまりの早さに自分でも上手く制御が出来ていないのか少し曲がるだけだった。

二匹が交差する瞬間、すさまじい衝撃波が発生する。アメモースがそのままシビルドンを抜いて、その背後で止まる。

次の瞬間、二匹は同時に倒れていた。

「アメモース、シビルドン両者戦闘不能！」

ジャツジがそうジャツジすると、俺たちは同時にポケモンをボールに戻した。

「中々やるじゃない。次はどんなポケモンを見せてくれるの？」

「じゃあご期待にお応えしてっ」と

俺がボールから出したそのモンスターは…

「ビビヨン!?!」

そう、ビオラも使うであろうビビヨンだ。

ただし、配信でくばられた『ファンシーな模様の』ビビヨンだ。

「その柄！まだ見た事無いわ！あとで映像に撮らせてねー!」

後ろからそんな声が聞こえて来た。

一方ビオラは…

「ふふふ、確かにその柄は一度も見た事が無いわ。そして偶然ね。私の最後の一匹もね、ビビヨンなの」

そういつてモンスターボールを投げるビオラ。

「じゃあどちらのビビヨンが強いか、勝負と行きましようか!」

俺がそう言うのを合図に同時に指示を出す。

「まずは眠り粉よー!」

「ぼうふう!」

ビオラさんのビビヨンが自分の羽から眠り粉をこちらに向けて散らしたが、それは全て俺のビビヨンの起こした強風で霧散してしま

う。そして風の強さにビオラさんのビビヨンが体勢を崩す。

「攻撃がくるわよ！避けて!」

と、言うと思ったので

「みがわり!」

俺のビビヨンが、突然人形に変わる。

「な！何処に行ったの!?!」

慌てて探し始めるビオラさんだったがもう遅い。

「いまの内だ！蝶の舞!」

ビオラさんは慌てた様にビビヨンに指示を出す。

「とりあえずあの人形に攻撃よー！ぼうふう!」

だが、ビオラさんのビビヨンは動かない。

これは運がいい!

「ぼうふう…まさか混乱した!?!」

さて、これで終わりだ！

「ビビヨン！」

食らえ…これが…ロマンだああああ！

「破壊光線だ！」

「え？ちよ、ま」

人形のクチがガバツと開き、そこからビビヨンが現れ、羽を輝かせながら急上昇し、相手のビビヨンに向けてそのエネルギー…破壊光線を解き放った。

あまりの轟音に耳を覆う。さすがに蝶舞からの破壊光線の威力はすさまじい。離れた所に居る俺でさえ熱気を感じる。

砂煙が晴れると、そこには戦闘不能になったビオラさんのビビヨンが居た。

「戦闘不能！チャレンジジャーの勝利！」

こうして俺の初めてのジム戦が終わった。

☆☆☆☆

「すごかったわ、あなたのポケモン達。特に最後の一撃は驚いたわ。はい、これがこのジムのバッジ『バグバッジ』よ」

「ありがとうございます」

バッグからバッジケースを取り出し、左上に収める。

「あと、これは選別よ。中身は技マシン『まとわりつく』よ」

「良いんですか？ありがとうございます！」

これは嬉しい。この世界では技マシンは中々手に入らないものらしいからな。パンジーさんに技マシンケース内を見せた時に驚かれた。

「次はこの町に行くの？」

「岩タイプのジムのあるシヨウヨウシティだ。」

それだけ聞くと、パンジーはビオラの方に向かって行った。分かれでも言いに行ったのだろうか

さて、シヨウヨウシティに行く目的は複数ある。一つ目は自転車の入手。二つ目はジムバッジ。三つ目はその先の町にあるはずのとあ

る物の確認だ。

「じゃあね、あんまり迷惑かけちゃダメよ？」

「お互い様でしょ」

向こうで別れの挨拶をしているようだ。まあ元々別々に暮らしていたらしいしあんな物なのだろう。

「さて、行きましよう」

「ああ、まずはポケモンセンターからだな」

そして俺たちは最初の一步を踏み出した。

4話 『出会い』

くミアレシテイゝ

「そういえばパルキアとディアルガってシンオウ地方のポケモンよね？シンオウ地方に行かないの？」

「まずは力を付けないと。伝説のポケモンって言う位ですから過酷な旅になるでしょうし」

俺のポケモン達なら確かにシンオウ地方に行っても通用すると思う。

だが、俺には常識が足りない上に人脈にいたってはゼロという有様だ。

あの二匹が同じ場所に居つずける保証も無いのでまずはカロス地方を制覇しようと思ったのだ。

「なら会わせたい人がいるの。こっちよ」

「誰ですか？」

パンジーに着いていくと、そこはポケモン研究所だった。

「ようこそポケモン研究所へ！」

「この人はプラターヌ博士よ。このカロス地方でポケモンの研究をしているの」

「佐藤です。よろしくお願いします」

「パンジー君から聞いていますよ。シンオウ地方に伝わる2匹の伝説のポケモンを探しているんだってね」

「はい」

ポケモンの研究をしていると言っても、カロス地方のポケモンが中心だろう。あまり期待しない方が良いか？

「私はカロス地方の研究が主だが、ちょうど知り合いにシンオウの伝説について調べている子がいるんだ。あとで紹介して上げよう」

「本当ですか!?ありがとうございます」

成る程、シンオウの博士というとなナカマド博士だろうか？

「名前はシロナと言ってるね、僕の兄弟弟子なんだ。それにポケモントレーナーとしても一流なんだ。色々聞くと良い」

「シロナ!？」

確かにあの人なら詳しく教えてくれるだろう。

というか兄弟弟子ってことはプラターヌ博士もナナカマド博士の弟子だったのか。

「知っているのかね？」

「シンオウ地方のチャンピオンじゃないですか」

「ははは、あの二匹を追っているだけ合ってシンオウ地方の事も調べてあるという事か」

「ええ、まあ多少」

「あとで連絡しといて上げよう。今日はミアレシティの観光でもしてきたらどうかね？」

「そうします」

「また明日来るわね」

そう言っつてポケモン研究所を後にした。

「観光…とは言っても停電中だからプリズムタワーに行けないのよねえ」

「そうなんですか？」

停電というと物語の初期段階の頃か…。

「ええ、まあまずはカフェにでも入りましようか」

「そうですね」

たまたま近くにあった『カフェ ソレイユ』へと入る。

「あら？あれは」

「何ですか？」

突然店の奥へと足を進めるパンジーさん。

「あら？パンジーさんじゃない」

「ご無沙汰しています。カルネさん」

そこにいたのはチャンピオンであるカルネさんだった。

「そこのあなたは…？」

「佐藤 海です。初めまして」

ゲームでも思ったが、この人のファッションはどうなってるんだ？女優だからつてするようなファッションじゃないだろコレ。

「ああ、この羽は趣味なの。可愛いでしょう?」

「は、はあ」

「海、紹介するわね。この人はカルネさん。女優だし見た事あるでしょう?」

いきなりこちらに近づいて来て、耳に『この地方のチャンピオンよ』と囁いてくる。

驚いたような演技をいながらカルネさんを見る。

「随分仲が良さそうね。それだけその子に期待しているのね」

「ええ、海はいまに化けるわよ」

俺を置き去りにして話しを進める二人。

エスプレッツォを注文して様子を見ていると。

「そこまで言うなら試してみようかしら」

「ん?」

半分飲んだ辺りでカルネさんが近づいてくる。

「私と勝負しましょう?」

「えつと…何故です?」

いきなり勝負を申し込まれた。

「君の力を見てみたいのよ。私に勝ったら良いものを上げるわ」

「分かりました。何処でやるんですか?」

「4番道路で良いでしょう」

そう言うって先に去って行くカルネさん。

「ごめんね。ちよつと大きさに言い過ぎちゃった」

「良いですよ。丁度試したいポケモン達もいましたし」

一回ポケモンセンターに寄って、手持ちを全て入れ替えて4番道路に行く。

そこにはカルネさん目的の野次馬もいた。

「ごめんなさい。気になるなら場所を変えるけど?」

「構いませんよ。見られて困るものでもありませんし」

少々視線が気になるが、バトルが始まれば集中できるだろう。

「始めましょうか」

「いつでも良いですよ」

「じゃあ私が審判をするわね。使用ポケモンは3匹、入れ替えは自由よ。良い映像を期待してるわ。始め！」

「行つて来なさい！ガチゴラス！」

「テツカニン！」

俺の初手はテツカニン。カルネさんの初手はガチゴラスだ。

野次馬からは

「ふふふ、良い出だしね。ガチゴラスは岩タイプよ。どうするの?」

「秘密です」

今回も道具は持たせていない。襷を持たせたかったのだが、ゲームと違って補充が難しいからだ。

「ガチゴラス！岩雪崩よ！」

「加速しながら守る！」

テツカニンは守るをしながら空中を高速で移動する。

「速度で躲そうつて魂胆?甘いわよ！」

「どうでしょうね?」

さて、相手の次の行動に寄るが、ここは少々掛けに出させてもらおう。

「テツカニン！剣の舞い！」

「ガチゴラス！ステルスロックで移動の妨害をしなさい！」

テツカニンが動きを止めて、その場で両手を打ち鳴らす。

ガチゴラスは目にギリギリ見えるくらい透明な石をそこらじゅうに打ち出し、テツカニンの機動力を削いだようだ。

だがもう遅い。準備は整った。

「バトンタッチ！」

テツカニンが目にも留まらぬ早さでこちらに接近してくる。

あらかじめ用意しておいたボールからバシャーモを出して待機させる。

「よく分からないけど、岩雪崩で追撃しなさい！」

テツカニンがジグザグに飛んで回避を続けバシャーモにハイタッチをしながらフィールド外に出る。そしてバシャーモが入れ替わる様にフィールドに入る。

「ポケモンの交換？いや、油断は出来ないか。」

向こうはどうやらバトンタッチについて知らない様だった。これは良いアドバンテージだ。

「バシャーモ…炎格闘タイプね。格闘技で攻めて来る気ね？果たしてガチゴラスに接近できるかしら？」

「あんまり嘗めてると足下掬いますよ？」

さて、どうやって接近しようか。

「ガチゴラス地震よ！」

「飛んで回避！」

バシャーモがステルスロックを避けながら空中に飛ぶ。

「隙だらけね！岩雪崩！」

バシャーモの上から岩が迫る。普通ならここで終わってしまうだろうが…。

「ステルスロックの岩を使え！」

バシャーモはステルスロックの岩を蹴り、ガチゴラスの方へ飛んで行く。

「早い!?諸刃の頭突きで返り討ちにしなさい！」

「そのまま速度を乗せて飛び膝蹴り！」

バシャーモとガチゴラスがぶつかり合い、土煙と大きな衝撃波が生まれる。

「くっ、凄い衝撃ね！オンバーン、風おこしで煙を払って！」

パンジーのオンバーンが土煙を晴らす。そこには倒れているガチゴラスと膝をついているバシャーモの姿が合った。

「ガチゴラス戦闘不能！バシャーモの勝ち！」

「お疲れさまよ、ガチゴラス」

ガチゴラスをボールに戻しながら次のボールを取り出すカルネさん。

「やるじゃない。なら、格闘タイプには飛行タイプよ！いきなさい、ルチャブル！」

カルネさんの二体目はルチャブルか…。

「ルチャブル！アクロバット！」

ルチャブルが飛び上がる。バシャーモがやった様にステルスロツクを踏み台にしてこちらに向かってくる。

「オーバーヒート!」

バシャーモの体から火が噴き出し、相手に向かって飛んで行く。

「ステルスロツクを盾にしながら前進しなさい!」

オーバーヒートは大多数が岩にあたり、消えてしまう。数発は当たったようだが、動きを鈍らせる程ではなさそうだ。

「飛び膝蹴りだ!」

「見切りで躲しなさい!」

バシャーモは、ルチャブルに向かって飛び膝蹴りを放つが、見切りの効果によってぎりぎり回避され、地面に落下してしまう。

「いまよ、フライングプレス!」

そこにルチャブルが飛び上がった、バシャーモにのしかかった。

ルチャブルが立ってカルネさんの方に飛び退くのと同時に、バシャーモが立ち上がるとうとするが、そのまま、また倒れてしまった。

「バシャーモ戦闘不能、ルチャブルの勝ち!頑張りなさい、海!」

「サンキュ。バシャーモ」

「さあ!あなたの次のポケモンは何?テツカニン?それとも3匹目?」

「コイツで勝負!」

俺がボールから出したのは、カラマネロだ。

「カラマネロね。じゃあまずは飛び膝蹴りよ!」

「サイコカッターだ!」

カラマネロが飛びかかってくる最中に、カラマネロが触手から飛ばしたカッターが相手に当たる。

「くっ、まだよ!」

「岩雪崩!」

カラマネロが岩を空に放り投げる。

「サイコカッターを当てて細かく砕け!」

「見切りで躲して!」

くだけた岩が、空から降り注ぐ。6割近くを回避した所で、いきな

り岩に当たってしまおう。

「なんで?!見切りが…!」

「気付きましたか?岩雪崩がステルスロックに当たって反射しているので動きが不規則になって、見切りでも全部は防ぎきれないんですよ。」

「っ!」

「止めのサイコカッター!」

岩を避けている所にサイコカッターを打ち込む。雪崩を躲すのに夢中で反応が遅れて、サイコカッターはルチャブルに当たった。そのまま戦闘不能になるルチャブル。

「ルチャブル戦闘不能、カラマネロの勝ち!いい調子よ、海!」

「ここまでとは…。とっておきを見せなきやいけない見たいね」

最後のボールを取り出すカルネさん。

「サーナイト!頼んだわよ!」

やはり最後の一匹はサーナイトか。

「ムーンフォース!」

メガ進化はしないのか。ならばやれる。

「サイコカッターで迎え撃て!」

サイコカッターで威力が落ちているものの、直撃したらまず間違いなくカラマネロでは耐えられない。なんとかしてやり過ぎす必要がある。サイコカッターとぶつかり、勢いが落ちたムーンフォースを横に回避する。

「もう一発よ!」

これで終わりだ。遺伝しておいて助かった。

「道連れ!」

カラマネロがサーナイトを睨みつけている。

ムーンフォースがヒットし、カラマネロは倒れてしまう。

「さあ、3匹目を…!」

いきなり、サーナイトに黒い煙が纏わり付き、サーナイトが倒れてしまう。

「なにが起きたの?」

呆然としながら言うカルネさん。

野次馬も暫くシーンとしていたが、やがて大きい拍手が生まれた。

「カルネさん、3匹戦闘不能！海の勝ち！本当に勝っちゃった！」

ポケモンをボールに戻した所で、カルネさんが寄って来て色々質問してきたが、野次馬もいるので一度カフエに戻る事にした。

そしてカフエ ソレイユ

「で、最後の技は一体なんなの？」

「道連れって言う技です。自分が戦闘不能になると、相手も戦闘不能になる技ですね」

「そんな技があるのね」

「やっぱり貴方について行くのは正解だったわね！あ、あと途中で使ってたバトンタッチって技なんだけど…」

パンジーさんが興奮した様子でバトルの映像を再生しながら使った技の解説を求めてくる。

全ての技の解説をし終わると、夜になってしまっていた。

「楽しかったわ。今度はポケモンリーグで会いましょう？私の全力を見せてあげるわ」

カルネさんはそう言ってミアレシティを去って行った。

ちなみに『良いもの』というのは、ミアレシティの施設を何処でも使えるという許可証だった。

なんでもスタイリッシュじゃなきゃ入れないお店も入れるのかなとか。

「さて、俺たちもポケモンセンターに行こうか」

「そうね、そろそろ行かないと部屋が無くなっちゃうわ」

明日も大変な日になりそうな予感を感じながら、ポケモンセンターへと急いだ。

5話 バトルと出会いと新たな仲間

翌日、俺たちは再びポケモン研究所へ訪れていた。

「やあ！待っていたよ。取り敢えず中に入ると良い」

1階ロビーにいたプラターヌ博士の案内で3階へのぼり、話しを始める。

「昨日、シロナ君に手紙を送っておいた。そのうち返信が来るだろう」
「わざわざありがとうございます」

どうやって連絡を取ったか聞いたところ、ナナカマド博士にシロナさんの別荘と自宅の住所を聞いて、ポケモンリーグを含めた3カ所に送ったららしい。

「それよりもこれから来客があつてね。良かったら会つて行くと良い。彼らもこれからバッジを集める旅を始めるんだ。旅には知り合いが多い方がなにかと便利だろう」

「お気遣いありがとうございます。じゃちよつとだけ会っていきますね」

「私も興味があるわ」

暫くプラターヌ博士と話しをしていると、エレベーターの方から声が聞こえて来た。

「プラターヌ博士はいらっしゃいますかー?」

その声は女の子の声だった。どんな子か楽しみに待っていると、博士が「ついてきなさい」と言つてこちらに戻つて来た。

「っ!」

なんとか言葉を飲み込む。なぜなら、そこにいた女の子は、赤い帽子とスカートを来た長い髪の女の子だったからだ。

見間違ひようも無い、ゲームでは女主人公として登場するキャラそのものだった。

「こんにちわ。私はセレナって言います。まだ新人トレーナーですけどよろしくおねがいます」

「あ、ああ。俺はサトウだ。よろしくたのむ」

「私の名前はパンジーよ。ポケモンルライターをやっているわ。よ

ろしくね。将来有望なトレーナーさん」

パンジーさんとセレナちゃんが話しを進める。するとまたエレベーターの方から声が聞こえた。

「ああ、遅れちゃった！プラターヌ博士ー」

どたどたと走ってきたのは4人の男女だった。

「やあ、良く来たね。かれらはたまたま来ていた友人でね。ポケモンルポライターのパンジー君とトレーナーのサトウ君だ」

「サトウだ。よろしく」

「パンジーよ。皆よろしくね」

俺とパンジーが自己紹介すると、4人も自己紹介をしてくる。

「あたしの名前はサナだよ！よろしく！」

「ティエルノって言います。ダンスが好きです！」

「ボ、ボクはトロバです。ポケモン図鑑の完成が目標です」

「俺の名前はカルムって言います。チャンピオンになるのが目標かな」

4人とも良い子達だ。それにしてもこの人数だと少し狭く感じるな。

「ははは、この人数だとこの部屋は狭いかな？裏にバトルフィールドがあるんだ。そっちに行こう」

そしてバトルフィールドにいどうした。

「そういえばサトウさんはなんで旅をするんですか？」

急にセレナちゃんが聞いて来た。俺は少し悩んだ後、答える。

「とあるポケモンたちを探していてね。プラターヌ博士ならなにか知っていると思っただんだ」

「へえー、そうなんですか」

「旅をしているって事は強いんですか？」

今度はカルム君が聞いて来た。俺は笑みを浮かべながらこう答えた。

「強いよ。俺は」

そう言うとカルム君もにやりと笑みを浮かべて来た。そこで博士が提案をしてきた。

「そうだ！皆でポケモンバトルをしようじゃないか」

唐突に言い出した提案だったが、反対する者は特にいなかった。それどころか、カルム君たちは賛成のようだ。

「じゃあ俺はサトウさんと…」

そう言った所で博士が割って入る。

「いや、彼とは私が戦おう。彼はとてつもなく強いからね」

「そんなことないですよ」

実際、今の手持ちのパーティーはそこそこだし。

「じゃあ私はセレナちゃんとやろうかしら」

そう言ってパンジーさんはセレナちゃんの手を取った。

「よろしくお願いしますね！」

反対側では、ティエルノ君とカルム君が待機していた。

サナちゃんとトロバ君はやらないそうだ。

まず始めにやったのはティエルノ君とカルム君の戦いだ。とはいえ、二人ともまだまだポケモンも弱いので特に言う事も無く良い勝負をした。

さて、次は…

「行ってきた、フォッコー！」

ほう、セレナちゃんはケロマツを選んだのか。

「行きなさい、オンバーン！」

パンジーの初手はオンバーン。相性は悪いが、圧倒的なレベル差があるので、まず負けはしないだろう。

予想通り、パンジーさんのオンバーンの勝利で幕を閉じた。空中にいるオンバーンに上手く攻撃を当てる事が出来ず、オンバーンの攻撃を食らってしまったのだ。

「うう、良い経験になりました…」

「ご、ごめんなさいね」

さすがにパンジーも悪いと思っているのか謝罪していた。そして最後は俺と博士のバトルだ。

「さあ、はじめようじゃないか」

「よろしくおねがいます」

パンジーもカメラを構えて準備OKといった感じなので俺はポケモンを出す。

「行って来なさい、リザードン」

「エーファイ、君に決めた！」

プラターヌ博士の初手はリザードンか。

「まずは小手調べからいこう。ねっぷうだ！」

リザードンは空に飛び上がり、エーファイに向けて炎の乗った風を送りつけてくる。

「エーファイ、光の壁で躲しながらすすんであくび」

エーファイは光の壁を斜めに展開し、風を逸らしながらリザードンに駆け寄る。以外と距離があり、苦労しながらもリザードンへとあと少しという所まで迫り着く。

それを見たプラターヌ博士は次の指示をだす。

「ぎりさくで迎え撃て！」

このままだとエーファイは切り裂くの餌食になってしまう。だが俺は慌てずに指示を変える。

「サイコキネシスで腕を止めろ！背後に回り込んであくびだ！」

リザードンの腕がピタツと一瞬動かなくなる。その隙にエーファイが背後からリザードンの背中を伝って上り、耳元であくびをした。

「よし！一回下がれ！」

「リザードン、そらをとぶで空中に逃げるんだ！」

リザードンが空中に飛び出す前に、エーファイは背中から飛び降りて回避する。

「落下しながらフレアドライブ！一気に決めるんだ！」

「エーファイ、めいそうだ」

俺は避ける指示を出さずに、今のうちに強化をしておく。

「余裕そうだね。さけなくても良いのかい？」

「そうですね」

「なんで…!?!」

なんでなんだい？と聞こうとしたらしき言葉は途中で止まる。な

ぜなら空中にいたりザードンがバランスを崩してエーフィの横を通り過ぎたからだ。

「眠っている!?!」

そう、あくびの効果でフレアドライブを発動する前に眠っていたのだ。

「止めのサイコキネシス!」

エーフィがサイコキネシスでリザードンを浮かせ、そのまま地面に叩き付ける。いくらリザードンでも一積みのサイキネを耐える事は出来ずに、戦闘不能となった。

エーフィは最初の熱風で以外とダメージを食らってしまったのか、見た感じ残りHPは3割程度だと推測できた。

「凄いじゃないか!じゃあボクの次のポケモンはこいつだ!」

ボールからでてきたポケモンはカメックスだ。

たしか、プラターヌ博士は初代御三家を使うはず。だったら残りはカメックスとフシギバナ。しかもこちらのエーフィは一積み。このまま3タテも行けるか?

カメックスの攻撃ならハイドロポンプでも一積み状態で3割削れないはず。念には念を、もう一回積んでおくか。

「エーフィ、前方に光の壁を作ってからめいそう!」

「カメックス、波乗りで距離を縮めながらハイドロポンプ!」

カメックスの足下から水が溢れ出し、こちらに向けてハイドロポンプをしながら突進してくる。ハイドロポンプだけならば光の壁があるのでイタク無かったが、その後に飛んで来る波乗りまで食らったらやばい!

「避ける、エーフィ!」

エーフィは避けようとするが、少し進むといきなり転んでしまう。

「なんで…っ!」

地面を見てみると、ハイドロポンプの水によって地面はぬかるんでいた。これを狙っていたのか!

次の指示を出す暇も無く、波乗りに飲まれるエーフィ。急いでボールに戻す。

「良くやってくれた」

「さあ、次のポケモンはなんだい？」

ボールを腰のホルダーに戻し、新たなボールを取り出す。

「サンダース、行ってこい！」

俺が出したのは、タイプ上有利なサンダースだ。だが油断は出来ない。サンダースの特徴はその素早さにある。だが地面がぬかるんでいるのであまり派手な移動は出来ない。

「またイーブイ系列のモンスター。イーブイが好きなのかい？」

「嫌いじゃないですよ。可愛いですし」

サンダースを見ると、体を震わせて答えてくれた。

「じゃあ行きますよ。サンダース、かみなり！」

「カメックス、避けてハイドロポンプ！」

カメックスは濡れた地面を滑る様にして、かみなりを回避する。かみなりはカメックスの後方に落ちる。

「よし……っ！」

だが次の瞬間、カメックスは痺れた様に体を振るわせる。

「どうしたんだ！カメックス！」

「地面ですよ」

「地面…そうか！」

そう、いまこのフィールドの地面はアクジエとハイポンの水によって水浸しの状態だ。その水を伝ってカメックスに電撃が届いたのだ。まあ威力は大分へっているだろうが。

「この隙を逃すな！ボルトチェンジ！」

サンダースが電気に包まれ、そのままカメックスに向かって飛びかかる。

「頑張ってくれ！アクアテールで迎え撃て！」

カメックスは勢い良く後ろを向き、尻尾を振ってくる。

サンダースのボルチェンにぶつかり、カメックスは倒れてしまう。だが、サンダースもアクアテールで打ち返す様に攻撃を食らってしまった。そのままの勢いでこちらに向かってくるので慌ててボールを出してサンダースをボールに戻す。

勢いがついていたのと、特性『げきりゆう』の効果で予想より大きなダメージを食らっているようだった。フシギバナと対面させるのは多分もう無理だろう。

「いやー、本当に強いね。しかし、なぜあんなに上手くジャンプを？このフィールドはぬかるんでいるはずだ」

「エーフィの光の壁ですよ」

そう普通だったらぬかるんでいてジャンプなんてまともに出来ない。しかし、エーフィの光の壁で、俺のまわりは水を撒かれなかったのでぬかるんでいなかったのだ。

カメックスが遠くに距離を取らずに近くで戦ってくれたのも大きい。遠くにいたらジャンプじゃ届かなかっただろうしな。

「じゃあこれで最後だ。行け！フシギバナ」

「俺も行きますかね。」

俺の最後のポケモン…それは。

「イーブイ！」

そう、進化前のイーブイだ。さらに、こいつには持ち物を持たせてある。それは…。

「ふむ、その鉢巻きは、こだわり鉢巻きかい？」

「しっているんですか？」

「うむ、前に訪れた町で売っていたのを覚えている」

まさか効果をいられているとは思わなかった。だがしっけていても遅い！これがイーブイの力だ！

「いかに攻撃力が高いと言っても進化前のイーブイじゃあこれは耐えられないだろう？フシギバナ、ヘドロばくだん！」

「捨て身タックル！」

イーブイはヘドロ爆弾を受けるが、それを耐え、相手に向かって一直線で進んで行く。

「避けない!?!」

プラターヌ博士が驚いた様な声を上げる。まあ耐えられないと確信していたのなら避けるかと思ってるわな。なぜ避けなかったのかというと、元の世界での経験でHDならメガバナのリフストを乱数耐え

することを知っていたので、バナの攻撃くらいなら耐えると思ったのだ。

そして捨て身タックルがフシギバナに突き刺さる。そして、フシギバナはその一撃で戦闘不能になった。

「一撃…」

「これがイーブイの力です」

危なかった。これが前の世界なら一撃では持つて行けなかっただろう。防御の個体値が低い個体のようで助かった。

「すっげー!」

その声を上げたのはティエルノ君だ。

「進化前のポケモンで最終進化形のポケモンを倒しちゃった!」

そう言つて驚いているのはセレナちゃん。

「強ーい!」

サナちゃんはピョンピョン飛び跳ねている。

そしてカルム君は無表情で俺の事を見ていた。え?なにそれ怖い。

「さすがね」

そういつて近づいて来たのはパンジーだ。また今夜も映像を見ながら技の解説をする事になるのだろうか。

「さすがだね。負けるとは思わなかったよ」

「ありがとうございます。俺もギリギリでした」

その後、博士は記念だという事で5人に卵とポケモン図鑑を渡していた。

…俺が持つてる図鑑はもう完成済みなのはだまっていよう。

「じゃあ、君たちの冒険が良いものになるように祈っているよ」

向こうの話しも終わったようだ。皆俺たちにお別れを言つて研究所を出て行く。だが何故かカルム君とセレナちゃんは残っていた。

「…いつか絶対に倒してみせます!」

そう言い残して走り去るカルム君。彼ならば良いトレーナーになるだろう。まあ、負ける気は一切無いが。

「あ、あの!」

セレナちゃんはこちらの顔をうかがう様に顔を覗き込んでくる。

「弟子にして下さい！」

「…はあ？」

つい間抜けな声が出てしまった。いきなり弟子にしてくれと頼まれたのだから当然だろう。

「パンジーさんにも聞きました。チャンピオンと五角の戦いをしていったって！」

パンジーさんの方を見ると、手を合わせて頭を下げている。

「お願いします！」

頭を下げて手を差し出してくるセレナちゃん。どうしようか迷っている、意外な所から援護がきた。

「良いんじゃないかな？ どうせ旅の目的は同じなのだろう？」

プラターヌ博士がそう言ってくる。

「分かった」

「！」

ガバつと頭を上げて俺を見るセレナちゃん。

「本当ですか！」

「ああ、だけど結構キツイと思うよ？」

「大丈夫です！どんな事でも耐えてみせます！」

ん？いま…つてこのネタは止めておこう。

「じゃあ明日の朝に5番道路に集合しよう」

「分かりました！」

それでわー！と言つて去ってしまった。さて、プラターヌ博士を問いつめるか。

「博士、なんで賛成したんですか？」

「ん？嫌だったのかい？」

「いえ、単純に気になっただけです」

「なに、女性それもあんな女の子を一人で旅させるのは色々危険だろう？旅に出したのは私なのだし、少しでも安全にしてあげようと思っただけだよ」

まあ一理あるか。パンジーも言っていた事だしな。

「あれ？パンジーは？」

「オジヤマかしら？」と言って先に帰ったようだよ」

「じゃあ俺も帰りますね。色々ありがとうございます」

「気にしないでくれ。シロナ君から連絡がきたらパンジー君に知らせよう」

そして俺は研究所をあとにした。

☆☆☆☆

俺とパンジーが5番道路へのゲートに着くと、そこにはもうセレナちゃんがいいた。

「やあ、遅れちゃったかな？」

「いえ、私も今来た所ですので」

「ようやく旅が始めるわね」

そうして俺たちは一緒に5番道路へと踏み出した。

6話 初めての授業

俺たちはミアレシテイから5番道路に足を進めたのだが…

「ガウツ！」

出た瞬間いきなり飛んで来たルカリオにセレナちゃんが押し倒されていた。

くっ、頑張れルカリオ！もう少しで見え…

「すいませーん！」

と良い所で道の向こうからローラースケートを履いた女の子が来た。

「こらルカリオ！いきなりどうしたの？」

少女が叱るとルカリオは大人しく少女の後ろへと戻って行った。

「ごめんなさい！私のルカリオが…」

「い、いえー！こっちも怪我をした訳じゃないので」

何も言わずに見ていると、パンジーが少女に話しかけた。

「あなたは確かジムリーダーのゴルニちゃんよね」

「あ、はい！シャラシテイでジムリーダーやってます。ゴルニです！」

さすがパンジー、ジムリーダーくらいなら知ってるか。

「俺はサトウだ」

「私はセレナ。私と同じ位の年なのにジムリーダー!?すごいんだね、

ゴルニ！」

「あはは、私なんてまだまだだよー」

と空気が和んできた所で、何故かルカリオが俺に向かって『グルルル』と威嚇し始めた。

「ちよと、ルカリオ！」

いきなりのことにビックリして思わず後ずさる。

「もう、今日は本当にどうしちゃったの？」

すると何故かルカリオは手振りで何かを伝え始めた。

「サトウさんが…ない？」

俺を指差した後で頭の上で×マークを作るルカリオ。

「もう、ごめんね。今日は調子がわるいみたい。シャラシテイに来た

らジムに寄ってね！」

「じゃあねー」と走り去って行くルカリオとコルニ。

「ふう、びつくりした。」

「じゃあ改めて出発！」

それにしてもなんでルカリオは俺の事をあんなに警戒していたんだ…。

もやもやする頭を振って意識を切り替えて先に歩いている二人へ走って行く。

「うーん、歩いているとき暇ですね」

「じゃあ俺がポケモンについての話しをしてあげよう」

「あら？急にしたの？」

首を傾げるパンジーに「一応、師匠だし」とかえしつつ、一番基礎的な部分から教えて行く事にする。

「そもそもポケモンの技は大まかに3種類に分けられる。分かるか？」

パンジーさんは分かっている様なのでセレナちゃんに問いかける。

「攻撃する技とそれ以外じゃないんですか？」

「うん、それでもまあ戦えるんだけどね。ポケモンの技は、物理攻撃技、特殊攻撃技、変化技の3種類に分けられるんだ」

「へー」と頷きながら手帳にメモを取って行くセレナちゃん。

「だから、ポケモンに応じて技を変える事が必要になってくる。例えば…」

俺はボールから2匹のポケモンを出す。

「メタグロスとサーナイトね」

すかさずパンジーが解説をしてくれる。

「この二体はそれぞれ特殊と物理に特化した二体だ。メタグロスはメタルクロー、サーナイトはサイコキネシスで道の横の木に攻撃してくれ」

メタグロスは右側お木にクローを、サーナイトはその場で左側の木をサイコキネシスで浮かせる。

「このように、物理攻撃技は基本的に相手に近づかないと当たらない

が、特殊攻撃技は距離が空いていても使えるという事を覚えておく
と良い」

それぞれをボールに戻しながら言う。

「へー、じゃあ私のフォッコは特殊寄りの方なんですね！」

「そういうことだ」

：正直、3値（努力値、個体値、種族値）を教えたいところだが、この世界で高個体値なんか粘ろうとすると生態系が確実に崩壊する気がするので教えない。そもそも、そんな値が存在する根拠もない。

と、ここでパンジーも話に加わってくる。

「当然、防御側の方にも物理防御力と特殊防御力があるのよ」

「なるほどー！…でもどうやって見分けたら良いんですか？」

「うーん、物理防御力が高いポケモンは見た目からして堅そうだよ。特殊防御力が高いポケモンは…直感としか言えんな」

考えてみれば特防が高いポケモンの共通事項ってないよなあ。フ
ラージェス、フシギバナ、ヌメルゴン…うん分からん。

「あとは…またの機会だな」

「えー、なんでですかー」

「前を見て見なさい」

パンジーに言われ、セレナちゃんが視線を俺から前に向ける。

「ズルツグ…ですね」

そこには群れバトルでお馴染みのズルツグがいた。こいつは群れ
バトルでしか出現しないはずなんだが…群れからはぐれたのか…？

だがこいつのタイプは悪・格闘。将来的に見ても炎・エスパーのマ
フォクシーの苦手な岩、悪、ゴーストを半減してくれる。ちようどい
い機会だからお手並み拝見させてもらおう。

「セレナちゃんはまだ手持ちが一匹なんだろう？…どうだい捕まえてみ
たら」

「わ、わたしですか!？」

いきなり指名されて驚いた様子のセレナちゃん。

「わかりました！…みててくださいいね！」

自身のフォッコをボールから出したセレナちゃん。ズルツグも目

を細めてやる気十分だ。

「そいつは攻撃力が高い！気を付けろよ！」

「わかりました！取り敢えず様子見の『ひのこ』！」

フォッコが口から『ひのこ』を吐く。ズルツグは避けようとせず、それを真正面から受け止めた。

何故だ？避けようと思えば避けれる位置だったはずだ。

「ぐるっ！」

ズルツグはひのこを受け止めながらフォッコに走り寄る。そして手が黒く光り始めた。

「フォッコ避けて！」

素早さはズルツグより高いのでフォッコはそれを避ける。気になったので俺はズルツグに凶鑑を翳す。

ズルツグ Lv23 ♀

じしんかじよう

にらみつける

けたぐり

すなかけ

だましうち

ずつき

いばる

かわらわり

しっぺがえし

レベルたけえ!?

この辺に出るのってレベル10代とかじゃありませんでしたっけ？

でもこれで分かった。さっきのアレは『しっぺがえし』だろう。いまのフォッコじゃあ普通は耐えられない。

どうかあのフォッコは何レベルくらいだ？

フォッコ Lv16 ♂

もうか

ひっかく

しっぽをふる

ひのこ

とおぼえ

ニトロチャージ

レベル差7か…ちよつとキツイな。

俺はバググからあるものを取り出す。

「セレナちゃん。授業の続きだけど、ポケモンには能力変化と呼ばれるものがある」

「能力変化…?」

フォッコに避ける様に命令しながら俺の話しを聞くセレナちゃん。

「そう、それが上がると有利になって下がると不利になってしまう」

「それはどうやったら変化するんですか?」

「ポケモンの技や特性かな。たとえばいま相手にしているズルッグの特性『じしんかじょう』は、相手のポケモンを倒すたびに自分の攻撃の能力変化を上昇させる効果がある」

「成る程」

俺の話しを聞いている間もフォッコから目を離さないセレナちゃん。

「そこで、コレを使ってみると良い」

「これは…?」

いま俺がセレナちゃんに渡したのはスペシャルアップ。与えたポケモンの特殊攻撃力を上げる効果のあるカプセルだ。

「フォッコー!」

セレナちゃんがカプセルをフォッコの方に投げると、フォッコはそれをジャンプでキャッチし飲み込む。

「ひのこー!」

スペシャルアップの効果か、さつきより1, 5倍くらいの勢いでひのこを吐くフォッコ。

能力変化の変化率もゲームと大体同じのようだ。

「ぐぐつー!」

ズルッグも苦しそうな声を上げている。

「いまよー!モンスターボール!」

セレナちゃんが投げたボールは見事にズルツグに当たり、ズルツグはボールへと吸い込まれる。

点滅しながら5回ぐらぐらして、動きを止めた。

「や、やったー!」

「おめでとう」

「初めて自分でゲットしたポケモンね。大事にするのよ?」

「はい!」

胸に抱えて大事そうにするセレナちゃん。

「じゃあもうひと頑張り歩いちゃいましょう」

「ああ、次からはポケモンに乗って移動するか」

「ダメですよー、新しい子に出会えないじゃないですかー」

そんな感じで次の目的地『コボクタウン』に向けて再び歩き始めた。

7話

「ついたー!」

先を歩いていたセレナちゃんが走り出す。

「こけんなよー」

パンジーと俺はそれを歩いて追う。翌日の夕方くらい、ようやく目的地のコボクタウンが見えた。

障害物も何も無い道でこれだと洞窟なんかがあると3日程度はかかると思った方が良いか。

「まずはポケモンセンターに行きましょう。部屋が空いてるか確認しないと」

「小さい町みたいだからな。満員という事はないだろう」

無事にポケモンセンターを見つけた。やはりゲームの時とは町の中の様子が少し違う。カフェの様な店があったり八百屋があったり。

「…なんか揉めてるみたいよ?」

「ん?」

町並みを眺めながら歩いていると、パンジーがポケモンセンターの方に何かを見つけたようだ。

「本当ですね」

「ちよつと距離を開けて様子を見ようか」

俺たちは声がギリギリ聞こえる位置で耳を澄ませる。

「だから!橋にポケモンがいて通れないんだよ!」

「すみませんが、私たちでは対処出来かねない問題ですので…」

「じゃあどうしろって言うんだよ!」

なにやら男がジョーイさんに文句を言ってるようだ。橋…ポケモン…まあカビゴンのイベントだろうな。

「橋が通れないのか」

「うーん、とりあえず休んだら様子を見に行ってみましようか」

俺たちはポケモンセンターに近づいて行く。

「すまん、入れてくれ」

「あ?ああすまんな」

意外な事に男は素直に道をあけてくれた。ついでに落ち着きを取り戻したのか、ジョーイさんに謝って去って行った。

「あ、すいません。ポケモンの回復でしょうか？」

「ああ、あと部屋の確認をしたい」

「運がよろしいですね。丁度あと一部屋余っていますよ。今ポケモンによる事故が発生してしまって、足止めを食ってしまっているトレーナーさんが一杯いるんですよ。ポケモンは…ちよつとお待ち下さいね。」

そう言つてジョーイさんは奥に引つ込んでしまった。3人分だからトレーが足りなかったのだろうか。

「一部屋か…」

「余つてただけでも儲け物と考えましょう」

「そうですよ」

ちなみにポケモンセンターの貸し部屋はトレーナーなら無料で使える4人部屋だ。

「お待たせしました。こちらのトレーにモンスターボールを置いて下さい」

俺たちは指示にしたがつてボールを置く。

「あら？このボール…見た事無いわね」

「ああ、とある地方のボール職人に作つて貰つたボールなんだ。ラブラブボールって呼ばれてるよ」

パンジーが指差したのはサーナイトの入っているボールだ。ここに来る途中にも使つたのだが、ラブラブボールの色はピンクと白。モンスターボールと見間違えたとも思つたのだろう。

「へー、なんだかオシャレですね」

「というか、あなた他の地方にも行つた事があるの？」

「いや、友人に少し分けてもらったんだ」

「へー」

友人の話しをされたらなんて答えよう？と考えているとジョーイさんが戻つて来た。

「お預かりしたポケモン達は元気になりました」

両手に一つずつと、後ろにいるラッキーが一つトレーを持っていた。

「ありがとうございます」

余談だが、今俺たちの手持ちは俺が6、パンジーが3、セレナちゃんが2なので間違える事は無い。

「まだ暗くなるにはちよつと時間があるし、橋を見に行きましようか」「そうですね」

「でもポケモンによる事故なんて危ないんじゃない？」

「大丈夫さ」

カビゴンが寝ているというのは果たして事故なのだろうか？

「橋に行くのでしたらこの町を西の方へ出ると良いですよ」

「ありがとうございます」

ジョーイさんが橋への行き方を教えてくれた。

☆☆☆☆

「なにこれ…」

セレナちゃんが絶句しているのが分かる。

「大きいわね」

図鑑によると、カビゴンの大きさは通常2m程、だがこのカビゴンどうみても2.5mくらいあるんですけど

「カビゴンは普通の大ききで体重が400kgくらいだ。軽く見積もってもこの個体は500kgくらいか」

「そりゃあ動かせない訳だ」

橋の前に陣取って動かないカビゴンを見ながら対策を考える。

ポケモンの笛のイベント…こなすべきか否か。正直、サナちゃんとセレナちゃんに思い出ができるくらいしかメリットが無い。

「あれ？セレナじゃないか」

「この声は…カルム！」

後ろを振り返ると、カルムと愉快的仲間達3人、それに見た事のない男性がいた。

「セレナ、そこは危ないからこっちに来てな」

「危ない？」

「じゃあカビゴンを起こすよ」

男：多分シヨボン又城の城主は笛を吹き始めた。俺たちは後ろに下がっておく。

「綺麗…」

セレナちゃんがそう言うのも頷ける。確かに良い音色だ。

「そろそろ目を覚ますぞ」

そう言つて男は後ろに下がった。次の瞬間、カビゴンの目が開き、こちらを向いた。

「ウオオオオオン！」

「あれ？なんか怒こつてない？」

「すまない、久しぶりに吹いたから少し怒らせたのかもしれない」

「話してる場合じゃないわよ！」

ズシンズシン言わせながらこちらに歩いてくるカビゴンを

「行つてこい！」

俺がボールから出したのはメタグロス。

「コメツトパンチ！」

「ウオオオオオ！」

相手のカビゴンがメタグロスに向かって倒れ込んでくる。のしかかりか！

「俺のメタグロスにそんな技が効くか！」

メタグロスのコメツトパンチがカビゴンに当たり、逆にカビゴンを押し返す。

「すごい…あのカビゴンを押し返した。」

相手のレベルは…

カビゴン ♂ Lv25

特性：あついしぼう

たいあたり

まるくなる

ドわすれ

したでなめる

なしくずし

あくび

のしかかり

まあこんなもんだらう。

「ウオオオン…」

弱って来て冷静になったのか大人しくなるカビゴン。

「たつく、余計な世話を…」

「もう大丈夫みたいだね」

そう言っつて男性（シヨボンヌ城城主）はコボクタウンの方へ去って行った。

「じゃあなカビゴン、お前ももうこんなどこ来んなよ?」

カビゴンにすごいいきずぐすりを吹きかけ、なでてやる。

「ウオン」

カビゴンはひとなきすると、懐から何かを取り出して置いて去って行った。

…どこに持ってた?

「なんでしようね、アレ?」

セレナちゃんが近づいて拾い上げる。

「食べかけの…リンゴ?汚いし捨てちゃいませうか?」

「待て、それは食べ残しっていう道具だ。結構貴重な物だぞ」

「そうなんですか!?!」

食べかけのリンゴがポケモンの道具とは思わなかったのだらう。驚いて見つめるセレナちゃん。

「俺はもう持つてるからセレナちゃんが持つてな」

「え、ありがとうございます!」

嬉しそうに鞆に食べ残しを仕舞うセレナちゃん。

「じゃあポケモンセンターに戻ろうか。もう暗くなる」

「分かりました!」

「あ、貴方たちは部屋取れた?」

「はい。運良く一部屋取れました」

カルム君たちも無事に部屋が取れていたようだ。

「じゃあ僕たちはこれで」

「またねー!」

手を振りながらさって行くカルム君達。

「じゃあ、俺たちも行こう」

「そうですね」

そしてポケモンセンター

「次は…コウジンタウンにつくまでは戦闘系のイベントは無いはず」

PCの前で手持ちについて悩んでいる。俺のポケモンのレベルは対戦に使ってた奴らは大体60前後。

技の為にそれ以上の奴らもいるが、大体準伝なので使用は控える。

「イベント?何かあるの?」

そうやって声を掛けて来たのはパンジーだ。

「いえ、何でもないですよ」

「また隠し事?ま、良いけどね」

…折角だしパンジーに聞いてみるか。

「パンジーは見たいポケモンとかいないのか?俺はパルキアとディアルガだが」

「うーん、そうね…全ての始まりのポケモン『アルセウス』ね」

「ディアルガとパルキアを生み出したとされているポケモンですね」

「あら、そうなの?名前くらいしか聞いた事なかったわ」

伝説ポケモン達は全員どっかいつちやったからなあ。…2体持ってたポケモンとかはこの世界でも二匹存在しているのだろうか。

「よし、この3匹だ」

「あら、また珍しいポケモンを使うのね」

「珍しいのか?」

俺が選んだのは、ニョロトノ・カブトプス・ラグラージだ。

「進化するのに特殊なアイテムが必要なニョロトノ、化石モンスターのカブトプス、ホウエン地方のラグラージ。少なくともこの地方じゃメジャーなポケモンでは無いわね」

「手持ちも決まったし俺は寝るよ」

「私も戻るわ」

☆☆☆☆

次の日、俺たちは改めて7番道路を歩いていた。

「おいそこのお前さん！」

「ん？」

「おぬしから預かっていたポケモンが卵を持っていたんじゃ。どうじゃ？欲しいじゃろ？」

…育て屋に預けてたポケモン…なんだっけ

「うーん、そうだ。セレナちゃん、折角だから君に上げるよ」

「え？そんなもらってばかり！」

「良い経験になると思うんだ。遠慮はしなくていいよ」

「…じゃありがたいがたく貰っておきます」

「うん」

育て屋さんからポケモンを返してもらってボックスに入れておく。

「なんのポケモンの卵なんですか？」

「お楽しみだよ」

「二人とも行くわよ？」

次のイベントは…地繋ぎの洞窟を抜けて凶鑑をパワーアップした後について彼奴らか。